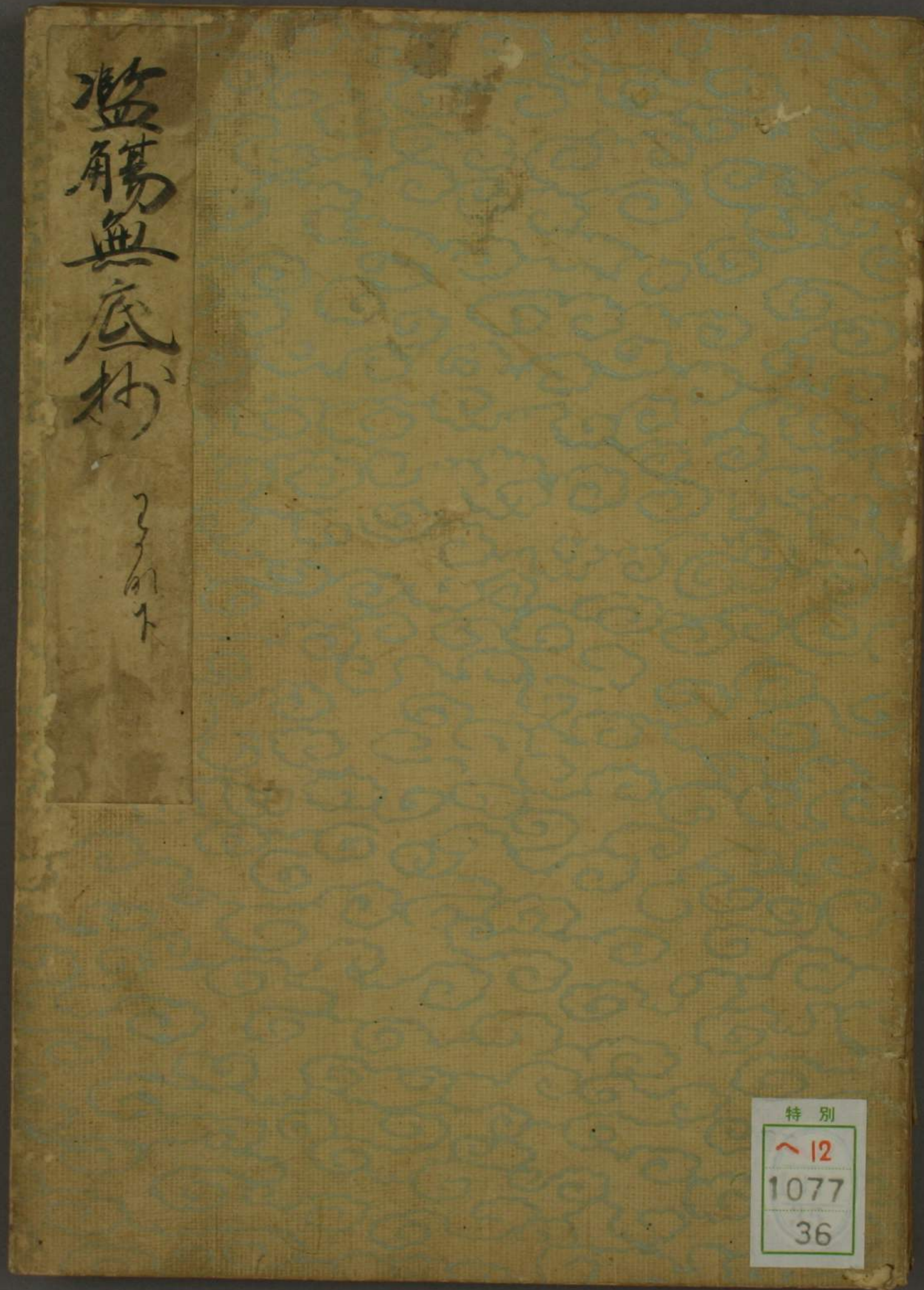


KODAK Color Control Patches  
© The Tiffen Company, 2000  
LICENSED PRODUCT



監觸無底抄

了  
了  
了

特別  
~ 12  
1077  
36







利  
1077  
35<sub>36</sub>





若菜下

四十一歳

三月廿日六条院了會事

三月廿日六条院了會事

同愛猫給事

同愛猫給事

同愛猫給事

介社母大官了  
り了事

四十二歳

四十三歳



四十四歳

四十五歳

四十六歳

廿年 綱云々ありてその内もかきあり  
 てそののみし西位より在るも  
 十八歳よりありせぬぬこい冷泉院御位  
 一つは御くみりあきまて二十  
 八年よりありてあり八徳院御位  
 二十六年よりありてありありありあり

何れもその形てその内もかきありて

以下の中いありてありありあり

春宮受禪事 今上是也

太政大臣上殿仕表事

頼朝は太将任右大臣鳥羽録事

六条女御御服一宮立切事

夕秀方右大臣任大納言事

十月廿日六条院住吉湯事

女御殿射上同車事



明石御方屋上又同車事

女三宮叙二品活事

紫上奏明石御殿女一文活事

花友里類大右友曲内膳三右活事

為明年年産院年賀人々習舞事

源氏守女御琴お女三文活事

今上車位  
四十七年

三月十九日女樂事

明石上院翫紫上和琴内明石御奉女御

御方々花喻事

源氏君与夕方大将音曲事

其夜源氏君後紫上射活侍相活事

人々御奉活活事

紫上おと〜亦七方りぬま〜り〜ん

〜事〜り三年のお遠ありま〜り〜ん

十一年〜り〜り活一り

夕方後女三宮御方活事

自院方紫上痛胸活事



御殿延川事

三月廿上後二条院活事

出侍任中納言嫁娶事在院女官事  
藤原官也

清門婿相活小竹后君事

四月十日山後市相出婿字通女三官事

祭日出侍婿独吟奇事藤原奇事

六条院後女三官一日當上戒絶入仍之海活事

物氣出現事六条消息所靈心

紫上清多戒勇額髮事

六月比紫上少除事

女三官自四月比懷好事

源氏後女三官清方活事

清門婿文小竹后身乃人女三官則撫苗端活事

源氏末扇一見見付苗端文事

源氏後二条院事

小竹后以源氏乃人付文事活事

源氏又後女三官活事

二条内約上出家事















河

うきくはう終ハ一きく 関東のまて  
うきてい海あり

秘

小竹垣内ぬまの口たし

いこやみりひ

秘

小竹垣うひくりつらりまては海(うき)

院の清海あなむじゆむ

秘

六条院し

因

大くハち切まよふ海流まよふあまの

そくろ流るむじゆむい海あり

此ころりの日く

秘

三月廿日やい事集あつ白(三月)

なぬおくまき海くまれと

海く物まれわんくう海を乃神いて

いさぬゆう七年い海ありくまひあり

そのあふれ花の色

女三のいあ、いれ花の色し

殿上れエミヤリのありゆみさく記とありく

秘

殿上れ賭射三月廿日倒とあまてなな集



右の清の三月廿五日として傳せられたるや  
いふなり三月のふは唐初よりいふは  
晋穆帝后と細人やうして九月九日  
三月廿五日といふとさうして礼記廿五日  
といはありて三月文あり三月ありは  
歳より一と云後あり又唐武后の時  
丹と平して軍成之の時凱旋のまじな  
廿五日と高帝は三月廿五日といふ  
ありと晋穆帝の例といふは流る軍

まじな事といふなりは期するは  
三月といふ事よなまじり九月廿五日  
と安喜帝の清の三月廿五日ありて  
十月よられ改行のまじり孫帝のまじり  
けりまじり後河相公廿五日といふなり  
文粹ゴクイよりみたり

秘  
河  
高倉院依義五年正月朔日あり安  
徳天皇の代ハ瑞帝節會なりしや  
西宮抄云殿上賜る帝後頭お後上取



方人充又不依以仍改書押小壁口府中  
點便所各為出后取、設御定陰陽  
師出后、桑内解陰書召文作事主上  
御射場射午善座王御依召定方奏  
市後奏出后令懸的天取渡的付善座壽  
刑善坐召方之此被作度數念人懸物主繼勝  
方稱王御以下主繼射進木懸物上以召取之  
掌令書分市後取掌善的付座侍次射  
ら、有中科人若

李、王記天曆五年二月十六日殿上賭う

三月事

賜う正月十八日於う場殿射、之府座御下事下

をらひ、ミキキ三月マキハ 井 為云れ之

秘 母后為云の侍三月三日ハ延行あつたり

三月と辨う倒花をよみえ、り好因

融院の侍代十六日の節今舞系あるに

ありて侍心あり後此事を此倒ひり

六乃院女加の事



秘

大層げよハ倅心ガ多ムいりて源そこれ  
事ありや

松若草上れ末よ拍乃夕雲より風  
なるんいぬのひま約りきて花のたり  
まこいさくまはるまのほひつるよま  
かそつ月乃ららよこいみせせまら  
ほと加つひらまほありいれ  
すまらうくーまここの次よこい  
ひーいしらほのさうれうあり

何

的射之右今よらまをせら  
みーれとあはハ因指し  
詩りハ園藥なま作まら  
的射りりくーらや

秘

右右ちおさうい  
舞里夕雲やむうくひら  
いひうりーまじ

まげこらあし

何

まげハ次おや 中お秘



こゆめのねひーーしからゆめのきんれう上  
よとせ

何寸 騎射二の歩射うらゆし 何寸 和名

かゝるまゝありへーとして

草ノまゝありへーハ 園后ト云々九礼と歩射の的ニハ  
的ニヨセテ云アリ

表

李部王記承平三年二月十日殿上  
侍に於才産院歩射又天曆四年十月  
十五日試春宮擬市ノ坊亮以下預  
試先試騎射次試歩射

秘

くらゝらなやい事なるよありて  
いふなり

後上人よりつぎくーい

後上人乃中めと射獲ト達ト

まゝまゝの心はよりい

何 弓の希後し 柘丸 命子と云ふゆえに

秘 あひひみくし

弁 同云はらりの屋なる一節を合

よとせはらりと云せ



こゆめのねひーーとからゆみ乃きれう上  
よとせ

何 歩射 駢射こゆめ歩射よりゆめ 歩射和名加知由養

李太尉歩射法を射以日先願其持  
心殿之今兼持心者の名宇

李部王記承平三年三月十一日殿上  
侍臣於朱雀院歩射又天曆四年十月  
十五日試春宮擬節中坊亮以下預  
試先試駢射次試歩射

秘  
くらくらなやい事なる上ありて  
いふなり

後上人よりつぎくーい

後上人乃中めも射獲し連しうと  
まゝ去る人の心はよりい

何 弓の前後に 拍ね 合ふとるぬる  
秘 ありふみくしうくはさぬ  
并 同云はよりの一節は合  
ふとはよりとせ



ひかりさくらびら実

秘 三月海りや

矢のひびくきつりとるともて

可 ひかりのみともまきとまきあはれぬり

秘 ちやまればぬりひけろ

秘 なるめたり根ね勝へぬのともまきと

秘 えんまふけ物とも

可 ああこのあかひとるともまきと

西宮抄云賭らうは進銭 自穀倉院進

出懸物 藏人持出活伸付

延喜廿一ハ息所被出 延長四 申宮被出 装束

柳の葉と百モびめて川ハ

可 史記曰楚有養由基者善射者也去柳葉

百歩而射之百發而百中之ハ右觀者數

秘 千人皆曰善射

養由基もいひつぬれよひこと

秘 こゆりよれ

とゆりハ右れを清

并 進清友ん

うけたりていとむ



よきことより物くと西さひてありき  
あゝいふつゝいふて然しと 巨き姿

大徳ありや百こひあてさう然をんぞと

いなり

勝負ういんぞとくびて身花れいゆんぞ

あゝいふつゝいふ大徳ありや射の道あから  
りあはれりなり 誠なりす念ふあり  
論語も射不はばといなり

たおらりなり 大おれや  
人ふあまきにあらぬをいふ

木本のおありはさや

かゝる心

夕霧わたり

いふことなり



夕雲の柳をむすゆいよはれおひ  
いでく家なうらうら

さうねい事あましく物もさうら

海より事あ人といふおれは

夕雲乃ゆよち事あも柳の源り

うしとくあまきんと家あ

け若ららの西行いとう因弟事地

これさあまひつゝいあしつ河のほ

うらうら

秘 栞本

人りてんつらう

秘 人りゆひとあ家い事

河 右人詩冊：批點するいあはいつう麻衣殿

いあまかくされは枕はあまう

人りかあまあまういあ

これさうらかあま事なうら

栞とのあまい人事あかあ事

女三乃事いあ



女乃のんこ

<sup>秘</sup> 弘徽殿之 柩4兄弟

うはあやうらひ

<sup>秘</sup> 兄弟さかく言と紙がれは海してさうら  
うおまよとせ

ゆらうらあやうら

<sup>秘</sup> 女之文乃事し <sup>再</sup> 女之れ事よまひ

あつせし

私ゆらうらふを不意事しあつせ

なとこふんかりし

を柩もあひひめしうらまことよまひ

てあひひあひうらまこと

おらうま <sup>秘</sup> おらうま

長文よりまのり <sup>再</sup> 牛産の清子女之

乃清兄弟たり

<sup>秘</sup> 女之文乃清兄弟は似るひあま

とこらとあるんこ

らるうか <sup>何</sup> 無論 <sup>勿</sup> 論



何 東文女三の事一似より

さつりの西ありさぬ

秘

去文ありのゆへとせらるるなり

くらぬゆへ

秘

物事の公

秘

小右記長保元年九月十九日者内裏

猫産子女院左大臣右大臣有産事有

衝重境飯納言之猫ノ乳母長令婦時人

吹之奇怪事ノ天以旨若是可有徵象未

圓禽獸用人乳嗟乎

何

寛平御記云

寛平元年十二月六日

朕因時述猫消息日

驛猫一候太宰廿貳源精袂滿来朝所献

於先帝愛其毛色之不類餘猫一也

黒色此猫深黒如黒鳥其形容要如韓盧

長尺有立寸高六寸許其屈也小如柁粒其伸

長如猿弓眼精日明螢如針毛之乱眩耳

鋒直豎之如匙七之不搖其伏卧時團圓不

見足尾宛如堀中之玄壁其行歩時窈

窈不同音声恰如雲上黒竜性好道行



暗合五禽常低頭尾著地而從耳背脊  
高二尺許毛色恍惚蓋由是乎亦能捕  
夜鼠挺於他猫先帝愛翫教習之後賜  
之于朕之撫養五年于今每旦給之以乳  
粥豈啻取枝能之翹挺因先帝取賜雖微  
物殊有情於懷育耳仍而日汝含滋陽之  
氣備交竅之形心有主宰知我乎猫乃  
歎息奉首仰睨吾顏似咽心盈臆口不  
能言

あまのひまわり 井 内裏の猫れ子のうい

秘 ろくしきりしれくまいさみ

秘 猫の子とみかみさくくはわらぬ

六条院に始まれば

秘 猫子の初女にまれば

んくぬきりかみ

んくまきぬりけく

初こわくしらく

秘 長文猫とまきりまのあり



く社名のあらはしむる

<sup>秘</sup> 栢子洞

ゆーりおろさうり

必猫とよしきみおのちかみ

りつふれゆい

<sup>秘</sup> の名中交らうしほく猫と女三多

ゆいせ

ろ社人とおろし

<sup>秘</sup> 長交乃ゆいにかみいりおのり

んそまうりゆい

牛産院のり

栢子の牛産院よりいり別と

うい

又おれま

<sup>秘</sup> 春宮に栢子長交の

ゆい

いふこいり人ハ井 猫と女之交より

おのり



花 虫の精猫といはしる人いせり度人  
みしてしつなりしを妙乃松とも人  
とよめりいしんやち悟の地とや  
松 柏木れ初と東院まてんりうまは  
人とい松をひしつりなれんは  
の類なり

字ふなりきさ度

秘 去文乃初

あまハさ家いんいんか

秘 柏木の祠猫ハよとさ家めと  
まを家ごもさうぬりのを

是らりいささうりい家猫ともあまハ是紙  
活らんと柏木のいりい  
一洗まの家ともさうぬりい  
さうりい  
洗い

人けと紙いり  
秘 猫乃初まよる



祇くといふらんぢよ

に 猫の字は音めしん祇くハ大書通なり

祇くといふらんぢよ  
といふらん

うくといふらんぢよ

并 猫の事とまゝにひらきまゝに日事あり

秘 家おめひとまゝにひらきなり

私猫のうくといふらんぢよ

とまゝにひらきまゝにひらきなり

むいりよあてかゝるん

猫

立候人のかゝるんぢよ

新をきまゝにひらきなり

なまゝにひらき

秘 なまゝにひらき

并 只猫のうくといふらんぢよ

あまことひらの契 何 川方のふなり

に 唐武宗時宮妃後身鳥猫事あり

まゝにひらきまゝにひらき



去交りしは猶或せとと拍風色を  
たちおとけお乃方 秘 玉うらこ 弁

大波の君くらりりこ

秘 大波の君くらりり玉うらの実れ兄才拍  
はるしや 弁

右ちねまるとハ

秘 夕雲のハハハハはは実子れはらふお  
事なり

心くのかとくくく

秘 夕雲れ性といなり 同玉うらの性といなり

私に心くくのかとくくくくハ玉うら  
れ性くくく

志げいさかしの 秘 名の中交ハ実れ兄才  
うれとくくくくくく

弁 名の中交

さぬとけおれじつひ

玉うつや夕雲実乃兄才うらてさか  
かかまうき事とさぬうら



ふふといふ

おとし君

秘

舞是く玉うらるといふ大切めつる事

このれんくみ

秘

玉うらとの清腹よハ女子さうい

まもへらこれ姫君と

ととの少芳れんくの姫君

おろらまうと

秘

或るま

書上又

とすねまれは又

け君ととい

とすねの君れ事

ふこののい

先帝乃或るまの事披ね君れ母乃又

おれまのい

秘

或るま當時のい

大乃院大後

并

源氏

致仕乃大后

大乃もさう世のい

并

舞是

ひめ君れお



秘

いほつゝいほつゝとてとらふ指の君おれ  
となつたはせ

とく君乃ち成あやしくひらりお

とらふ指君れ母おれけの事

まうくの清あより 秘 玉うらや

弄 まれうらられ君乃心

きりつ交れひと 秘 雲こ

おふしきお事さもふれぬひて

秘 玉うらとらりうらつら事とせ

さそこのちいあやう

秘 さいひもれいさぬうや

おれわたりせきしれら

秘 或る交へりりあ

大まなうら 何 或る交 は 雲上

弄 或る交 秘 或る交れ雲上

回 或る乃 雲まきい 指乃 介 祖母

私秘因ちの事不審或る乃 雲乃 交  
うれあまハ或る乃とらまといきり



ゆきうら文乃室ははしりて葉よ大  
おれかうしうれのものとしり

いさしなやま

秘 屋そ傾杖あるか

つこあかりうみあさこい つこい葉よ

秘 ありんこはくさばといなり

れ葉のぬ色とていれんよや  
うけひき、はつううぬゆあふあ  
て且いんあそくれいぬあそ

大文ハ女こあま

秘 嫡女ハ頼是乃室ハハ離別せり又王

とて田よまのりはひーと秋好中交  
りけおさねく后よさらま事か  
き

并

或る少方れ女は枝根の母も頼是  
るまよ又王女御とてうらよ事り  
しんーと秋好中交りけおさね  
為事とと地なりーと



松井花にさくはちまゝと歌ふ小方こ  
うきり不審

おうりーのうり

<sup>秘</sup> 我清じとめくられさひのさけり

さうりあまうよひきれととせ

さう君にあやまきひりお

さう小娘の母君

たわうくしう事よきうりんと

舞もも枝枝の君とむうれがうわ

ー流りあくと時器ーあよとせ

まらうせほひよもらわの方と

<sup>秘</sup> 堂もるつりよの小方とのこま

堂もるつりよの小方とすれがうの

こらよ似らう人ともわの

私堂もるつりよの小方ハ二条お圓の

とみゆきの人れ事うやれあも

りり又ゆれあもれ事有流も

何事しあう少書



あ〜くハあ〜新し

けさ申す様もかこらるしお〜か〜ね

〜の仕方よハか〜進歩なる〜

大さや

母もさ〜し〜<sup>秘</sup>ま〜様君の實母

大おとされ〜

舞臺乃心〜又〜人ろ〜は堂

兵〜柳〜

〜の〜心〜流ハ〜

うき世し  
おひひそは  
枝根ト葉トノ  
物ウケナレ  
中七ハ呂  
カニトリクテ  
カリ〜

舞臺乃合点るれま〜

〜の〜と〜

かん乃考も <sup>秘</sup> ぶろ〜

か〜れ〜け〜

けさ御交れあ〜

活〜ハ〜我ガ〜

〜おひひ流〜

そのか〜け〜

れむろ〜中〜の〜



人といふにふかしくしとらぬ  
何しの活しと舞且と勢なり  
ぬる事かりしとていふなり  
とて活しんとしりてきりて  
まればしりてまじりて  
厚うなきはむろつれりり  
さへ活しん取ふ公つひせ  
あましりもさういふ  
秘  
玉うろつらとまればの事  
あはれひ

活しんを

せうの考らるして  
秘  
まれば乃兄弟の通し  
秘  
私け  
玉うろつの方なり  
ひかひひとまれば乃  
乃えん  
私う  
まう



警方方よりとりのあつくと公はひ  
みたりそれとまればの若い玉  
警方腹の男まゝらあゝて継母  
かゝりおのさるうまえとておれお警  
れおひきひおまゝとて弁たよ玉警  
乃さゝらとていふおひひおの  
れおおらうとておれおのさるうとて  
おうとていふとていふとて

先或柳文は室家よりとるおの母若乃  
母たり市上大后といふおはれとて  
ゆり或柳文な家一とてまゝとて  
としとて弁たよとておれおの  
おのさるうとていふとて

私大お方の同弁肉とてせめてま  
らとてまゝとておれおのさるうとて  
秘大お方のまゝ

おのさるうとていふとて  
おのさるうとていふとて



とぞ〜てま心し

私は何れおとしのふい〜たおのふれ  
さうおく〜てい事し

まをりりき〜おし

<sup>秘</sup> 昔のま

ゆりさ〜ららさうあ〜ら

堂文〜れ極〜津き〜れさ〜い

〜ゆみ〜これ中〜あ〜

<sup>秘</sup> 二年〜りか〜ての極〜り〜け後極大

後れ〜り〜おし

〜り〜て〜月〜かさ〜りて

<sup>秘</sup> 源氏軍〜二〜り〜事〜し内〜

〜一〜の名〜若〜夕〜おし〜

ま〜り〜け〜ら〜事〜し中〜よ〜り〜

内〜り〜し〜れ〜ら〜の〜つ〜せ〜は〜十八年〜

らせはぬ

<sup>何</sup> 仁明天皇治十七年 義和吉 喜祥三

十八年〜め〜り〜せ〜り〜年〜



の清寧にたり(三ノ有)

清和天皇治十八年 見貞觀

無繼嗣例

朱雀院 昌子の親王 後一條院 章子の親王

聲香子の親王

光  
冷泉院ハ源氏女八輩の時多御ありの  
あくらをいとし左位の時多御あり源氏  
軍十二歳より十八年よあまふ十八  
年左位ハ清和天皇の例ニ秘

并  
十八年此例在河海に共ハ源氏軍十二歳

と軍七歳とていゆりぬ十八年よりせ

孫しきりげはよまふれ子もさゆ

つこのみさらもよめみかへへ冷泉

讓位今上即位源氏軍十二歳十月より

位長治又年如りぬ軍七二月ニ女

武平十二月朱雀院御堂事よりあり

冷泉院ハ讓位の次の年在位より十八

年よりよりよりして治人の年齢より



他知一 源氏平きよよしなり

此の若 <sup>秘</sup> 皇子まゝ 後さか

世れ中へうまゝ <sup>并</sup> 冷泉の清公

おろしんてし

<sup>并</sup> 冷泉院清氏とよみ厚うまゝやひひ

事くれいぬうらひし内への清公

かききあへおろしんてし

日しういともりくだやませ給

<sup>河</sup> 依御系俄脱履授延喜例 <sup>李</sup> 王記

<sup>秘</sup>

陽成院依御脱履の事あり <sup>并</sup> 同

おろしんてし <sup>秘</sup> 拍子の又

<sup>花</sup>

大政大臣波任の例ハなまれと在右乃

大臣波任ふなり <sup>秘</sup> 但天曆三

年正月三日是日大政大臣波任表經年

<sup>并</sup>

冷泉院の代り大政大臣同白し給ふ

此位と申り <sup>秘</sup> 又職と辞す

波任せん也



同云霞仕冠成くみある一物しつり  
々出仕と金めくは右とつと云々時を  
冠と入まりしき也

年ぬくまのりつりとなん

<sup>河</sup>東觀漢記曰王莽居攝子宇諫莽而莽  
誅之逢萌謂其友人曰三絕矣不去福  
將及人即解冠掛東門去後漢書逢萌  
字子康北海人掛冠辭母牆東陶弘景神  
武門掛冠去

た方右大臣

<sup>再</sup>ひげあり

<sup>秘</sup>舞是 園の小なりよし

栗田園白 道兼干時右大臣 抄録

女御の君くく家代

<sup>秘</sup>采香殿の薙舞是の兄弟之去宮女

女御之再

かきりあふ位と

<sup>花</sup>今上の女御御贈后の幸といは  
そのうー流れ 人れんあはし



冷泉院女御の一交

秘 的右中文

并 的右中文腹れ御子也

右右の君大國云よかりてまいのたよふる

ふまひぬ

并 夕霧方かりまよた右とあり

六重院ハおりの後ひわり冷泉院の御世に

何 冷泉院事 世次ありわれ清門冷泉院よ

うおりまひされハ冷泉院とまふえんさ

に

冷泉院ハ大炊内門南ニ条北堀河西宮

東四町累代後院ハ清滅天皇ハ此院

弘仁十四年四月十日天皇ハ近冷泉院十

七日讓位於皇太子淳和承和元年八

月近冷泉院天長十四年帝朝冷泉院

嘉祥三年正月同仁歩之三月晦日幸冷

泉院覽櫻花天曆三年九月廿八日陽成

院以冷泉院被奉朱雀院八年三月十日

改冷然院為冷泉院



秘

朱雀の清くいふ事と源氏の  
おしくつらふふ冷泉院とありて初て  
くまのれり力のふくと冷泉院と  
なりとつらふ冷泉院とありて院  
きく火災ありて冷泉とありて火災  
とありて冷泉院とありてと  
とありて冷泉院とありてと  
とありて冷泉院とありてと

を

帝皇系図曰弘仁十四年遷于冷泉院十七日

讓位於皇太子天曆八年三月十日改冷  
泉院為冷泉院

わあ 秘 ともらあまことつらふむま

六重院の清くいふ事と源氏の

冷泉院ハ減ハ六重院の清くいふ事と源氏

りハ桐葉の清くいふ事と源氏の

おあ 秘 ともらあまことつらふむま

多石ハ書平中ねまのりらつらふむま

乃清子ハいふ事とつらふむま



ういふひあわは是れよりきとれ一代りりよ  
て末乃代よははさく治りぬ冷泉院の所  
事とまきよあさりてさよふる一思ひ  
るやまう一い事とあして

私うらるやまう一い事とあはぬかきみ

治りぬ一い事とあはぬかきみ

并 冷泉院のときうては治りぬよ源氏家通  
り事とあはぬかきみあさりてさよ  
由代とつていよあはぬかきみ

す人の世まてハ

秘 未まてハお預一治りぬかきみ

人りのこまひあはぬ

秘 源氏ぬいよあはぬかきみ

長宮女御ハ

秘 由石中まて十八年めはかきと幸と送る  
るれ事とあ

源氏のころはさき后よりかきよる事と

何 幸花物語より源氏乃ころはさき后よ



多事ハ去日の非此頃よりありとせし  
より嫁子申交乃時の事也

也

蔭云女院 先帝由女  
相重后 秋好申宮 常坊由女  
冷泉院后

明石姫君 源氏由女  
今上后 是と源氏の打行く事

ありといひ會り蔭云秋好の姓と源氏

源氏めていふれとて是と女といふは

乃こころや源氏の后よりありと家あり

秘

蔭云秋好の申交乃時よりありといひ

是と源氏よりありといひ

事非物清とひかり

冷泉院の事いふ

秘

秋好

ゆきしてなりとていふ

并 秋好乃心は源氏れかりしはひよりあり

とありかきとおる事

松ゆきとていふ事ありとていふ事

院のみし 秘 冷泉院へ 并 冷泉院ノ常院ハ

事なりとありとて

事ありとて 秘 女之事あり 并 花鳥



又この由をさしめし 秘 女三ハ今上れぬらん

并 又この今上

たうこれ世あそ

秘 目めも大切りしはつらや

多いのりれぬいといふ 可 徳又 ま 徳

秘 されともは紫上にハるひかくい

中いしう家ハ一り

ゆし紫とれ中し

いぬハかりおちさうのせふぬひあして

并 紫上ゆしとれ

けち中虎ハおきハ一りさあまむけりなるおし

ておこるいともさるえとや

けは紫の包中なるを

あつまのくつ 秘 源の詞

いづかぬらまにかいある事あまし

ゆしは事素懐とよや

あままりてゆりく

けあはゆしとよとてをさうく



えんといふこと終二つあり

あみせよかこん

又のりあふらふらふかひはよむかひ  
はまれかこんあふらふらふかひ  
はなりのまらふらふらふかひ

源の生家の後ろくこと終一つあり  
かあふらふのまらふらふかひ

如部乃君こらむらふらふかひ

<sup>秘</sup> 石中文字業よと実母れとく三行あり

はくといふれれ 昭右よ

中くあり

明る上れあふらふらふかひ

——いふや

あはるき 昭右よ

あふらふのこひかして

石まれ幸ありとあふらふらふかひ  
こらむらふらふ

河海こらむらふらふかひ

此四行は  
首書



お借らうと書表紙の事としてあり  
て御免の事として同日の事として  
同日の事としてあり  
秘ノ義奥子あり照して首書に  
まみりし清乳の事

長保五年九月九日御堂関于時隨身  
室家泰石清水并住若給東遊跡示ふ  
有し今桑原氏若相具皇土泰清住若  
可准く

年々の春秋のからいたるに世にいなり

<sup>并</sup>の石入道乳よ毎年せし跡ふなれし  
なり世に未れせし清までの事

きんごの事いふにひらきして  
<sup>秘</sup>天下れも母うしあつていふはありかた

事あり

くくくくくくくく  
<sup>秘</sup>文子あり

私乳書の事あり



仏神のまじり

死書のおとひさし佛神も細文あつた  
なりしありし入道の又書成は長か  
ふ

あつたおとひさし

あつたおとひさし  
事のおとひさし又書成は長か  
ふ

あつたおとひさし

乃おとひさし

乃おとひさし

乃おとひさし

乃おとひさし

乃おとひさし

乃おとひさし

乃おとひさし

乃おとひさし

乃おとひさし



くの事とせしむる始也

<sup>秘</sup> 見を以てく<sup>秘</sup>の事とよみ候事とて此事

ふいりくもくきとて

<sup>秘</sup> 此堂殿の例花名よりてなり

私前あり

大后よりこころ

右大后ハ舞是之今一人ハ左大后ハ内也

なり

まひ人のまよひの事とせしむ<sup>秘</sup> 花名よみあり

舞人の十人右清の始殿の條時とて此

おと<sup>秘</sup>六未府此とけりとも之陪後とて

人と云十二人の位立位六位各一人なり

とて七位<sup>秘</sup>の事とれりともとて

えりり又く<sup>秘</sup>二人ハ加陪後とい

ぬこれと共清射なり物と云日条内清使

乃時舞人陪後ハ女を清の官人也

條時条の試系調ふとハ兵清陣也

れとおこあるなり陪後ハおなり共清同



昇  
同云東遊の舞人の事ハ加陪後ハ等  
の時くりの家事あり

一節今の代りハ滿原所の祭此時陪後ハ  
外ハ加陪後として諸家の事をしめし之  
らりし事あり昔ハ皆道の者とも扱はる

べいぶらうも

昇  
け市ハの陪後ハ近清司ハ人々去日舞人  
の陪後ハ近清司ハ官人や祭儀時祭  
の儀示ハ兵部司ありあまハ陪後おるハ

兵部司禰 同云陪後と奇人といふ事

うさびく心へまゝ一答陪後ハ原時祭  
乃時方人めてハゆれと二字とて人  
をよむつらさるる也

くりり家より

何  
加陪後二人 近清司側可勤

秘  
加陪後として諸家の事をしめし之

くりり家より

昇  
加陪後ハ兵部司ハ人ありあり



又うらうのこゝろをいとおぼく

秘 此御宗も清を清の御人

秘 任右として御宗あり

弁 御宗乃人相も又ありとらへり

曰云文院

曰今上 春宮 四石中宮殿の二文院 冷泉

ひまろひといふ人こと祈りよとハ

馬副隨身 小舎人童

秘 ひまろひハ侍のとき清とともありこゝろは

申る方れふと

弁 同云分やりのふりうといふも答者時

申同ふんさいれふと又も副よといひ

のとき分やりのあり

女御女いれり 秘 四石中宮は上同車

才一乃車

はまの車よいあしの清とては云えはひ  
けり清なり女御れはめ乃とあらり  
てのこゝろ



私に車よ六の石上と清乳母とあひ  
乃みもせきとせびく居み浅き乃  
せし後世に心きりよとかがす  
ろのこしとみきく見し母あり

<sup>秘</sup> 女清乃れめれと華内を分よとのみ  
<sup>昇</sup> け乳母け時の心きりよと見し母あり  
あま内とらるるの心

私め石上母乃居よとのり流る車  
け乳母も乃りよと家とせ

かこくれ人多し <sup>可</sup> 後車よとや

人給 <sup>前よはる</sup> <sup>副</sup> 車 <sup>ヒトタニ</sup>

うのゆくの五 <sup>ち</sup>

<sup>秘</sup> 若上乃れ女房なり

女清乃れいけ <sup>め</sup> 石清く

あし <sup>の</sup> ぬあ <sup>れ</sup> の三 <sup>秘</sup> あま <sup>の</sup> 流

同云車の事にあまの流せしる一勤  
あまの別の心きりよとあまの別  
車に一答かみ字よとせし



とてあはれきりておれくは老の路のまはる

は後世乃事りくうとあていりし

も 古今長弁なるのまはるおちきん

人せうくして <sup>秘</sup> 海に下し人のあつたよ

してまゝ口見とせ屋云乃老後ま

くくさせんおあし

大さひきまふまゝしんし

けいひめいけいおまさんいんてあは

きりめおちるせ

おま屋うまじん世

も 車又乃御信よつておちてせよん

のまりのいおら

秘 せいしりりおん

おひく屋云のまりおちていけおま

まおちてまゝいりてあかていり

秘 町石上あていりてあはれきり

の事りてせ

十有なりれし百なり

カニナキ



元 十月二十日 上中下三の松の葉を採りて  
の十日に於て一ノ松の葉を採り  
採りて其の葉を採りて又其の葉を採りて  
葉なりし者ハ乃み林と云ふぬふあり  
何 ちりやふ松採りて其の葉を採り  
あつたなりりひりりり  
一況云松の下葉ハ其の葉ハあつた下廻り  
紅葉ハいしなふくハ下葉ハいぬふり  
りみらせぬふりて其の葉を採りて

秋と云ふれいん

并 松樹の葉多

と云ふのみ林と 何 古ふれんてと云ふは

秘 川ありりさ波面白く紅葉せぬふり

松葉採りて其の葉を採りて其の葉を採り

乃み林ありけ系系ハ昔よりいん

松乃あつたの下紅葉おりりり

いりあふとソつちヤ川かろり

ありてあふみの 何 東遊津ま



しんらあせいほりーしんはんとふ  
まうーしん

河 神奈ハ打物として拍子と調うる也

秘 ぶとハ和琴ノ大鼓をてんてぬと鼓  
すれぬといふ也

秘 しんらあせいほりーしんはんとふ  
大鼓なり也

取らハ 秘 伝書也

山あつたまふ竹のうらハ 河 山藍小忌也

秘 賀茂臨時祭舞人竹又青摺袍蒲菊

傑下襲地摺袴合袷從後摺又青摺

袍柳色下襲衣白表袴合大口弁洗半

臂緒引帯小各用付

秘 舞人の着けり小忌代いり藍にて也

并 祠のけりき東遊の装束也

かまのたて又ハ

原時宗梓ハ使藤舞人様從山吹從  
從若湯ハ使舞人從從也



花乃上と右少くまの法社行なれ時  
車格よ八使もあふし

め乃のまふひいろぬ

秘

まうひまふくこいろみれ河程の義あり

一とねわれ事物一程の約

弁

同云いろなる書写の誤もや一勘いろ

をまめくゆれ

りし焚こころ休ふすまよ

河拾遺米子

ちちゆめりひ野は松乃枝三まみらよと

風らよまといろちかり

まうちりなるみか人こちめかぬまて

秘

花鳥りりみさり

弁

くくぬま東格

花

東遊譜云先一二弄次駿河舞次米子

加太旅呂之調子高舞双洞也

長保五年住吉請於清社在府以下

上達部其外殿上人合十人舞

神主立舞相府脱衣被



し葉は八行舞といふ事、神社行幸  
加柳、栢湯の村に

末子こころ後らつ下十人がぬき舞  
事ありかくありと云をれらこま  
なりとらうかさねハ高の下かさねハ  
又さひまハ高上人の下かさねといふ  
紅のあこめは時毎といハ紅葉入りとら  
あていハ高み細く

とらうかさねのさひまの

秘

けのみ字をさむむと下かさねの事也

私花もよすらうハ高の下かさねといふ  
うめハ高上人の下かさねといふ  
りハ高と月ハ

ひさかたらう

并

同云がらうハ高の事也  
ぬき事といふは後らつ下ハあはれかたぬ  
ささかたは神

秘

かさねらうとぬきとみかた



きりぎりすのまじい家

秘 おりぬののまじ

松とくはふまき

秘 おりぬののまじ

いそろくかたきぬにまじりて

何 萩拂ひまじりて

署堂乃清沖末の武王執柄家

元 萩とかなすまは人まの

萩とかなすまは人まの

人まの沖まじりあり

秘 小いぬおまつ

何海乃況不書之只舞人の時乃舞

秘 可し事あり

井 何海よ人まし書り不月

り舞ありまきハ

秘 ちりあ上人あも舞り

陪後少くハ

あハ一同云何海



枕柄家もくおこあつて時疾れ夜を持  
や<sup>之</sup>し疾となくん事け時よなきかえり  
りハ車遊乃まれ舞り疾れ怒し  
ふ家とむらり<sup>る</sup>一勤げ事未一ばく  
回云を遊幸津事の時りりおこま  
一勤合点

りり<sup>ひ</sup>

<sup>秘</sup>後あるといふ話へるれ

二乃くら<sup>は</sup>よ<sup>并</sup>一書<sup>の</sup>車<sup>の</sup>次<sup>る</sup>家<sup>ハ</sup>一<sup>後</sup>あ

な<sup>し</sup>も<sup>り</sup>内<sup>の</sup>か<sup>こ</sup>入<sup>ら</sup>て<sup>お</sup>は<sup>ぬ</sup>  
<sup>秘</sup>め<sup>名</sup>乃<sup>は</sup>れ<sup>か</sup>こ<sup>こ</sup> 圓<sup>め</sup>名<sup>よ</sup>の<sup>あ</sup>こ  
<sup>原</sup>く<sup>ろ</sup>又<sup>ん</sup>と<sup>り</sup>て<sup>は</sup>な<sup>れ</sup>津<sup>は</sup>む<sup>ら</sup>家<sup>松</sup>よ<sup>り</sup>  
む<sup>ら</sup>の<sup>あ</sup>り<sup>ま</sup>津<sup>又</sup>と<sup>り</sup>ん<sup>の</sup>ま<sup>れ</sup>と  
法抄<sup>は</sup>か<sup>一</sup>

か<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>して<sup>め</sup>名<sup>り</sup>と<sup>は</sup>海<sup>の</sup>事<sup>事</sup>  
女<sup>津</sup>の<sup>名</sup>乃<sup>お</sup>り<sup>せ</sup> 名<sup>の</sup>海<sup>を</sup>  
世<sup>と</sup>ら<sup>む</sup>と<sup>は</sup>ひ<sup>一</sup>人  
<sup>秘</sup>入<sup>道</sup>の<sup>事</sup>一<sup>并</sup>



西の石戸

任はしむる家かひのつらぬきとていふものも

并

西の石戸の事とて海士とていふ人とも

石の心

秘

造り妙く我身の事とていふ人とも

おと一海一海といふ人とも

ひしとていふは任者かひの事とていふ事

秘

石の心とていふ人とも

海士とていふ人とも

并

石の心とていふ人とも

の海士とていふ人とも

の事とていふ人とも

の石とていふ人とも

の心

松の心

松の心とていふ人とも

松の心とていふ人とも

松の心

松の心とていふ人とも



何

君耳唯聞堂上言 君眼不見門外事

白氏文集

五十一

夜のふの松よみゆくと雲ハ津波をうらむさつふさ

秘

堂上の弁しくうらむさつふさ

あつせいのあつ人のあつさつといひつる雪の  
あつをあつりやまのまうりのさつりけり  
ゆのさつりやまといよくさつりけり

何

浪起奈田行斐海花用月令不依春

村雪琴野相云

い、葉古人人我此得不可或人会野相云

詠小ひのふさくゆさつりけり

い、未動出ひさつりけり

文時ら弁さる

後補納后

世装第子

ひさつりけり

さつりけり

い、葉けみ時さつりけり

い、いよハ雪波津のさつりけり

い、いよハ雪波津のさつりけり

い、いよハ雪波津のさつりけり



ゆりのハみゆりハとそまゆりもゆりを  
吹こゆりゆりのハゆりハ壬午忠見  
り集りゆりゆり平中納言ゆりゆり  
お清りのせりゆりゆり清貞ゆりゆり  
氏ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆり忠見ゆりゆりゆり  
かゆりの事ゆりゆりゆりゆりゆり  
せゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

一あみ事ハ又清輔家ゆりゆりゆり  
お清りゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

<sup>秘</sup>  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
ゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり



明名書

神人乃カミヒト

もよりのしほ探らむとせむとておぬれぬ  
おまじなり事なるは法抄にありしよし  
そはぬれりのおとしは海にけり  
やぬれりのおとしは

中務者

秘は志よれ女房

是ハ神女にて紫のかたあり

中務者

らありころゆらまうひととをきいらさぬ  
秘とまハおれごとくひきこあり

洗子ワシゴ

私沖れ治定の納受れたる

らあり ういゆれ

はましく教ふれ

秘弟よ地

いでまゝして おくのせぬとて

射していなり

りし清とせむとて

何沖系藩よとて中ありけり沖とま

まわたりあり

私沖系の方中まされは

何のせり



多ひととさういふかたがらおきて

何

津糸おきてとハ寒天の露色を或云私試は

合てあみ衣の露といふ

秘

津糸おきてる津糸とら人の面し

秘

津糸よハ勸益ありなご

夜火もうけまありくらんれれまんさいく

何

津糸有千歳早秋

何

せんさいくせんさいやらしあめせんさいや

事方万景

せんさいくせんさいやうけのせんさいや

庭燎 四色字苑云 燎 照 反 和名 連 比

毛詩有庭燎篇

ちんせん一巻

私河海川あかり不用

うのりさぬの色くまらあ

何

四位紫 五位那 六位保袍

秘

四位五位まーッラヤ

あてみびのおりてありて 秘 織て霞

何

おまわりおきてよくらうけの消とるるハ



洗みなりと

并

減て霞うらや一ととて減て

同おりてハト車事しめる

まりうらなかり

何後言うら

りまじい

女房らとのいなる

まうハト天かんぬ

何沐寶

うら川のせうら

消遙あそびばかりのよき

みけく家もう家さくせうら

なまは

秘

傍切らりありうさか

かり入道の

是ハ石若ぬれよるれん中とありて

うきうれ

秘

かぢりの事よら世よらて

こらましらハ人もある事

るま

かて事なりうらハ海とんや

秘

け入道の屋よ世よら



あふいづくまともゆくと家事とを世  
ろりハかゝれ事といふ

私う家ささぬと入道の心といふ  
まんそくせぬ事とこれとをさるり  
くひいゆ事ハうれ事なりといひ  
てきて又入道のあつくていふ事  
ぬらんハ一服のうらうらやあゆと  
浮判一ていふ事

世中乃人よまことたれとめて 秘 弟子地なり

の子細ときくといひてハ世は人の心  
多くうらん時代とせ

河 長恨歌傳曰男不封侯女作妃 君  
看女却為門楣其天下必呈次幕此

めてあさき 秘 圓世俗よ物をあさみなり  
いふ事

ちドのおくのものを君  
粗言めれてうらり

入道のみことハ 秘 身産院のい事



四のありとも

今上は御政ありてふといふははたしな

あり

春秋乃の約キヨガタ

秘 朔親行をせ

可 春秋乃を朔親之

孟子曰天子適諸侯曰巡將々々者巡  
所守也諸侯朔於天子曰述職々々者  
述所職也無此事者春首耕而補不  
足秋首歛而助不給

ひり文乃の事

女三之

この院をハ

并 六条院の事

秘 源をハち々々の事也ていふはよきとみ  
はたと肉一とは

二子ありはるくは家とまゝは

秘 女三宮二子ありたりと

秘 祿令一子親王射八百戸位田八十町  
二子六百戸位田六十町三子四百  
戸五十町四親王射減半位田減三



分一十町の陸王陸王陸王陸王陸王  
今案二石の親王は對三百石位田二  
十町也河海くくりしをかんくま  
れり也

二石親王對百石下位田六十町

秘  
け事此也

同云清對對戸乃戸としつらハいづ振の  
事多や一物戸ハ氏ナヤ千戸万戸と  
いふを氏戸とよせしむんれと對

戸の事也

及びれうかくと月よそくかしくま  
りしおかりり

業上れさるやかしくはさりけりハ  
女之を今上れ御妹めく二石さ  
まあの上ハ女御の實母もけり  
す清多れり一人もいふもいふ  
ひもさる  
しり男いひさるの



秘

ひさしに海のさうりさ〜ふねをたて  
まのふりりや

あすりさ〜つりさ〜

秘

籠の年とく〜おらう〜わ〜

さ〜き〜屋〜

秘

紫上れ心付るみぬ〜

内乃ら〜

秘

女三交乃清事内乃女とさ〜

いさのみ事あきハ〜

あや

わらのみ事屋〜く〜き〜

秘

女三交とむ〜

さ〜

さ〜

秘

葉上のさ〜

東宮の清さ〜

秘

ゆ名中文の清腹〜

うげ〜



いづれにせよ

ゆ右申文版のまゝならんといふまじは事だ

いとおしのみまゝとせ

夏乃雨

秘

花友里

并河

曲約

惟光

朝臣

并

夕霧のちねの清子とてつとまゝ

かゝえもかゝるもハ 内約のまげ版の娘君

原とらうとみま

とくまのまを

ゆ右申文の清版夕霧の清子おま

まハす清ハ繁昌あつし

つましくともうとまゝはま

原のまゝならん

友のまゝのまゝならん

秘

舞

ひのひげく〜まゝなら

何

まゝとて原れならん

并

まゝの若原氏乃雨とてまゝならん

あしすゑならん



源氏乃心

姫文乃心

<sup>秘</sup> 女心

女御の君ハ

<sup>弄</sup> 桐音

中文ハおしるひ流ハ心屋とありて  
しハけ女三文乃事とのみ源ハ心屋  
つげこま

ふ乃ちといひ心屋ハくおされん

<sup>弄</sup> 女三文

<sup>秘</sup> 女三文乃事

私女とてんてり最多の義ハ朱雀

院のといひひけよらん

<sup>弄</sup> とりりを知ん <sup>秘</sup>

私女世もかあつまらん

ふいりらんいぬらん

<sup>秘</sup> 女三文乃事

くみのありもこれ

朱雀のりかともあつまらん

とれいも 再会も



生れみきの心(きん)

こころのまじり

身産乃れ加へ女三すのり(きん)

はいてあきて

つきとあきていひこ(きん)

あふり(きん)

今年身産の御辛字十九(きん)

よんて(きん)

われあ(きん)

秘 此(きん)

此(きん)

秘 此(きん)

何 齊 日本純

白氏文集 十三年来(きん)

事化人間(きん)

不食困

韓康伯曰(きん)

延喜式曰(きん)



菅家御集云紙裏生薑稱茶種竹籠

昆布記存儲

人の所公志るひ 河知 心調

右大屋乃所こもしうり

秘 舞是くおきあさ人くよまひとあさ

ぬまふなり

ちねの所ツレコさい一のまけりせくるそく

久秀の所子三人の月典侍り一人

あつりしとみひ

秘 七文いりしころのせむいばいし 弁

兵衛乃文のいしはせん

弁 雲文れ所河童よや又孫まじ

まはりしりきま人の所と 秘 女ま 弁

まりしとまらんりりハ

秘 原の契りりりをくはひつんと 弁

院よと内よとゆりくあり 弁

院乃所希もて 弁

きりやとみん 今上れ作し



大いしとれん子よつきてりりてさひき  
琴之大曲也春ハ角夏ハ徵秋ハ商冬ハ  
羽上用宮也律ハ寒呂ハ温也分清濁  
詔立音法曲也蔡邕女訓曰舅姑若  
命之鼓琴心生坐操琴而奏天若  
同曲名則捨琴与射曰其曲小曲  
立終則止琴有大曲中曲小曲也出  
太平御覽  
尚書曰声依詠律和声

色謂五音宮商角徵羽也律謂六律六呂正月  
之音氣也主當依声律以知樂之

そののさひきとれん子よつきてりりてさひき  
秘 蔡邕女訓曰舅姑若

樂書曰仰文之妻易寒暑孫登之感  
動風雷云琴書云仰曠ト吾之樂官  
也上於琴能易寒暑占風雷為吾  
平公鼓之感玄鶴二人下舞

心もとれん子よつきてりりてさひき

女之乃ゆきとれん子よつきてりりてさひき

ゆあんとれん子よつきてりりてさひき  
何由梅押是こはは



秘 由ハゆりしおんすりのいよとせ

女御の君 秘 明石女御

乃こころおおはすおとよもきしこころみ

弄 明石女御の御うせ又とてい白き山交

懐妊おふなり

ウツヤ 又月りりあんなり流しはかみとささるい

何 宮女懐妊者散斎之前退出有月事者

祭日以前退出宿所不得上殿其三月廿

御斎預前退出宫外 物長令

秘 十一月 何 十一日とてハ事ありまひ

秘 十二月十一日神今食事

十一月とてハ一廿十百とあり十一日神

今食祭斎の日なまきり也又十一月神事

此月之あむたし

弄 十一月もや但流中十一日し神今食一殿の

神事とてもや可為諸改なれ

因十一日とあり又十一月と書なりあり

なりしと流しはし



秘 四女帝の御心し

その月八日よらひておとせ

何 枕あふよふまゝに御心すの月夜

とありんし

秘 人のちてふら御心しとち御心しハ

多く評ひるし

因 古きハその月夜御心しとち御心し

ふいるしよハいれうく

秘 いえうりしとち御心しとち御心し

御心し

やうか御心し

身首中歳原字十七歳れ

院の御心し

秘 身首中歳原字十七歳れ

何 何れとせまよまゝに命より御心し

とありんし

キエラキトシカニリ  
二月十日

二月十日ありしと院の御心しひりせ



ふいりつねよ

芝の女これ琴といひりりあふ

いりひめね 筆琵琶

女<sup>ツニカク</sup>系<sup>カク</sup>あけみきせん

女<sup>秘</sup>之<sup>カク</sup>まハ試<sup>カク</sup>示<sup>カク</sup>之<sup>カク</sup>幸<sup>カク</sup>産<sup>カク</sup>院<sup>カク</sup>あ<sup>カク</sup>く<sup>カク</sup>取<sup>カク</sup>作<sup>カク</sup>わ<sup>カク</sup>る

い<sup>カク</sup>い<sup>カク</sup>あ<sup>カク</sup>し<sup>カク</sup>幸<sup>カク</sup>の<sup>カク</sup>人<sup>カク</sup>く<sup>カク</sup>を<sup>カク</sup>く<sup>カク</sup>女<sup>カク</sup>系<sup>カク</sup>ま<sup>カク</sup>て<sup>カク</sup>し<sup>カク</sup>幸

何 左傳襄公十一年鄭人賂吾侯以樂吾

侯以樂之幸賜魏絳

史記曰孔子為政齊人懼挾鉏乃遷

齊國中女樂好音八十人御記云天徒

三年十月十九日召内教坊妓女十人

令奏絲竹

く<sup>秘</sup>後乃抱れよとことしそ

世<sup>秘</sup>乃れ物乃よひしこい<sup>秘</sup>を<sup>秘</sup>さ<sup>秘</sup>る<sup>秘</sup>こ<sup>秘</sup>い<sup>秘</sup>ひ<sup>秘</sup>て

師の平せれ事よとらよと

い<sup>秘</sup>ぬ<sup>秘</sup>く<sup>秘</sup>ま<sup>秘</sup>る<sup>秘</sup>ま<sup>秘</sup>い<sup>秘</sup>

秘 時分乃りし終り内よとくれりい<sup>秘</sup>き<sup>秘</sup>り

秘 松原の自償の因之承心乃よとよいあ



かよの事ハありしと也

又二乃の事ハこれれりしと也

秘

苗代ノ者ハ其母ナカハ源流ありし事

ナカハ事ノ事ハこれと也

三ノ事ハこれと也

秘

琴ハ女ニ交ヤシ候人ナリ人ノ事ト也

四ノ事ハこれと也

事  
女ニ交ヤシ

五ノ事ハこれと也

秘

此ノ事ハ一ノ事ハこれと也

十ノ事ハこれと也

院ノ事ハこれと也

年産ノ事ハこれと也

十ノ事ハこれと也

年産ノ事ハこれと也

二月廿日ハこれと也

三月廿日ハこれと也

三月廿日ハこれと也

二月廿日ハこれと也

秘

事



志がくめい

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

志がくめい

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ

あつあつ



并秘和秘秘あり何海あり

何 あと一尺云五位袈裟也青袂事也

青磁是八茶碗名也其色似花物也

案之襖子九延喜三年正月十四日端

寄御記云寄以給袈裟人給袈裟人

藏人取人等給襖子

私云襖子ハアヲト云物ハ事歟如何

うらめかし

何 袈裟ハうらめかし或はけふかむなり

ゆらら後とてありいひさハ略後

文の所秘女秘之ヤ

あ秘とふ秘あ秘とふ秘也

何 あと一尺云五位袈裟也青丹ハ濃青也

あ秘とふ秘也

青丹万葉ありあ秘とふ秘とふ秘とふ秘

ひら秘枝秘のつらあ秘とふ秘ぬ秘り秘り秘

て土差秘と秘は秘り秘あ秘とふ秘とふ秘とふ秘

一洗秘緑秘青秘り秘は秘り秘乃秘物秘諸秘去秘日秘祭秘り秘



此之いあがしり柳かきねさるりい  
院おりしんんんん 秘 隠し

ちのおかいらのうらめんのまりののおよね

并 舞臺の男子に人なり先腹子二人なり

大殿のくわいりうらむうら腹子嬌す

いぬり女まりいよてあ年力あてじ

ま

たちおのりたさうらうらえん

夕霧の婿男雲井のり後たちお隠し

いしし 并 佐乃地名し

あんぢのうら 可 洞地袋

まりのかくあしし 并 琴のしし

秘 女之文のあけみおいらひさしおしし

用さあつや

ちおと 秘 夕霧し

あし乃考とあちてい

四石上れおの寄原氏れ侍才さ

いしんししししあああああ



和琴ハ目もめて此の物ヤ六絃少く  
絃ナリトモまくれ多きは物よあはれ心  
くありて此のうき大車もくまはれ  
こゝろ

去のこの様いふれうまにあはしり

<sup>秘</sup> 古来のねがひ事し

<sup>異</sup> 同云去のこの様いふれうまにあはしり物  
たりある式なまはれ物とこのひな  
うまにあはしり物とあり一物去の字もあや

まりあみうさうねいままはれ九 <sup>義</sup> 妻

り芳を別

智人のさしりし

<sup>異</sup> 田裏までのもりし

花ハこれのうた書 <sup>異</sup> 梅を家へ

<sup>秘</sup> 梅さうへーあまはれ雪れあつてあは

乃心なみへ

<sup>同</sup> 梅さうへ書ハ古書ハ去年の書也

私古書の美し書ハ所書うへ



右宮の御

うらひとさきほけりよき御

何 花乃を風のふりたたく

さきよきくよハ御

おののありの

右中と

はりののさきよきくよハ御

源氏筆と下りのさきよきくよハ御

さきよきくよハ御

かろくきくよハ御

秘 源氏御

うらかきくよハ御

秘 夕霧

いらありののさきよきくよハ御

發弦筆調子弦也双調以三為發盤

傍調以五為發

花 發の弦ハ初弦といふハ調子の美

声といふハ一弦調ハ一の弦といふ

といふハ一弦調ハ一の弦といふ

并 宮乃弦也ハ見何海未変



かたぐさありせりりい

<sup>秘</sup>夕霧よいさなほくとや <sup>并</sup>

さうふり乃れあそひ <sup>秘</sup>夕霧の河

さうあふま <sup>秘</sup>原の河

うけくささとの井さうい <sup>可</sup>直衣

かみさひくはてけいひ

園勢のまみのかりくうゆれ

ぬくれぬらうのち

<sup>秘</sup>よく秘ちち <sup>并</sup>あそ

<sup>并</sup>芳とほみり <sup>可</sup>とや

<sup>可</sup>ゆらう <sup>秘</sup>上福乃な <sup>秘</sup>或云和琴と秘ち

乃芳といふれ <sup>秘</sup>但是いさ <sup>秘</sup>もさ <sup>秘</sup>よ <sup>秘</sup>あ <sup>秘</sup>ら <sup>秘</sup>れ <sup>秘</sup>い

お語り人の <sup>秘</sup>これ <sup>秘</sup>成 <sup>秘</sup>福 <sup>秘</sup>とい <sup>秘</sup>は <sup>秘</sup>ら <sup>秘</sup>す



あまのあり

物のひびくあり

<sup>并</sup> 東の山々のひましくらゝのさかひ

くらしくありて <sup>秘</sup> 夕霧の

とさくしありて

<sup>秘</sup> 夕霧のさかひあり

月かきしありて <sup>并</sup> 妙の十日の夜

<sup>秘</sup> 十日の夜は月かきしありて

松月のさかひありて

けまは河よりありて

ありてありてありて

まは清のさか

<sup>秘</sup> 夕霧のさかひありて <sup>并</sup> 女

二月の十日の夜ありて

ありてありてありて

とさくしありて

<sup>何</sup> 白雪花繁空拂地緑線枝弱不勝

鶯鳥 白氏文集柳



棠花の小枝の君はとこらうとて  
にちぬめううく二月よりれきより柳  
乃きぬしうり

棠花の羽風よまひく青柳のみされて  
物と作しうりか

緑絲枝弱し詩

交うされうり 并 川のまてが

ふらうなふ 并 懐妊の時し

かたけの西とて 并 大れめくし

さうりくハまこのがし

眼鼻ハ帝たなまハおやういんあは

花しいりゆううりあし

何 桜よりいまふ花をいふまは

あまふくおあしあよ 私不乃し奇

秘 どのかたわあうや楊花と牡丹は

かり唐胡よ叶しそつハ牡丹のよこ

我朝の叶しいゆるハ桜の事とされまは

うまこのふくたりきてあのもしとれぬ



こゝろのこゝろ

とよの、裳のうれきまれ

花

柳のまぬよしのの裳をぬかぬ

私の石上の裳はけいけい

れといふすゆわ

まがめもわで

因

なれりゝのぬなりしきも早く

くらのもてあゝはげさく

桜

あゝみさひさふといひさぬか

いぬれおしり

きりきり花くらえれ

何

くらえいんさく花くらえの葉さく

おとひまゝいのは

花

さめさめいぬらえれ乃香紙けい

ーの人乃袖れ香えすれ

松

みらるかゝみ月くさき地まれの

みくみ月まのぶ部ののらさ

みらる月なり







秘

おろろ月夜ふりてみたりてはなをりて  
れおろろ月夜ふりてはなをりて  
るはをみのふはりのとせ

かほりたるおののひの声りておせり

秘

虫のしりておのきとらりて合(并)回

秋のよのくほまき月 夕霧ノ網

花の露もいりて 秋のよの

まれそつれたとく(一)き

并

秋のよののりすともれちお又南をりてあ

夕霧ノ網

秘

笛れ初るしとむ事いよまのん

夕霧ハ南付成かあそい海り

女のまはれあそい

何

女感陽氣春思男感陰氣秋思(毛詩)

いれよのさこいめよ

秘

源氏の初(并)

いみじくも人のこころを

并

いみじくも人のこころを



何 春秋乃勝負事し

ひしうりしひしき事なるれ

いれしひしき事なるれ

松はりありし

去れしひしき事なるれ

つぎはりしひしき事なるれ

いありたり

おのりおのりしひしき事なるれ

のりしひしき事なるれ

何 曲呂ハ春の三々九律ハ秋の三々一と云ん

中ハ律呂といハ律ハ陽正之呂ハ陰助之

然ともて律呂系ハ呂律といひて律と

次りしひしき事なるれ

何 ぶくの曲呂ハ日中ハ呂律と陰陽と用

ありや唐ハ八律呂といハ陽と陰と

異 ころしといハつたれ物といハ云ふ事なるれ

こまじしひしき事なるれ

同云りしひしき事なるれ



といつきの地よきふ調曲といはるるの  
もらいつきと律とつきのふか  
けつめや一動傳るるよふの呂律もつ  
けつり

同女胡の伶倫のおつと呂律と陽法と  
月4、い傳るるよふもけつなりとや一動  
唐より律呂といふを陽と云ふを陰と  
文明庚子同答以上一動一依至若  
尊下此所

いふみ今

<sup>秘</sup> 南時のおつきの人と傳のつよ

らのこつみと

<sup>昇</sup> 人よむいふおのつみといふりよ  
とまはひつらまか



秘  
人より密よりかくれいなり仰先スの事  
あり

かろるる女より かくれいなり

とありていひまじき

秘  
女より密よりかくれいなり

私におしひまじき  
たしき

あやしく人よりかくれいなり

とありていひまじき

秘  
かろるる女より

秘  
け女より密よりかくれいなり

奇持より密よりかくれいなり

原の自撰也

秘  
原氏の元よりかくれいなり

私におしひまじき

下し原の元よりかくれいなり

や多くかくれいなり

ありていひまじき



内裏の事く物乃くも他およそは  
あり何事も藝能の事なり  
所前めく一きまみよえり  
これめとし取乃女宗ハ勝方あり  
汝の夕霧の影も観る人  
もははあんとり

<sup>秘</sup>夕霧もりやとらと針みき  
けりたり

あよとひてい

夕霧れもるあゆむ功者あり

のりての代 <sup>可</sup>上代

<sup>秘</sup>ひの事くも

<sup>早</sup>上代 夕霧も早下ての代

きかてい

<sup>室</sup>翠色 <sup>拓</sup>和琴 今の世は

いしあな

あしかりぬあをひと



あつたふゆのうたをうたへ

あつたふゆ 唱歌

和琴のうたのおと 秘 夜はた長し 并

あつたふゆのうた

并 寒暑あしわよかまひて酒合せうら

なはらまぬ 因ふらふひさしおみすの

こゝれ地をさやまのしとあゆむを

いそかへあつたふゆのうた

秘 せうとあつたふゆのうた

あつたふゆのうた 并 原は春 秘 原の河

あつたふゆのうた

原のうた 秘 原は春

あつたふゆのうた

あつたふゆのうた

あつたふゆのうた

秘 原は春 并 原の河

并 原は春 秘 原の河

あつたふゆのうた



おれぬ事にて

<sup>昇</sup>大井此宿止の事し

<sup>秘</sup>此名ありきくものら大井の事にて

まじり事し

私名もてまじり事し<sup>昇</sup>

まじり事し

此名上れ既登り京までいふありき

此のまじり事しは名よの事し

<sup>秘</sup>まじり事しは名よの事し

（自叙ありし人おまじり事し）

うらの事しはらくよ

世の事しはらくよ

<sup>秘</sup>諸道とまじり事し

まじり事しはらくよ

たれ事しはらくよも奥義と極まり

と極まりはらくよ

あひまじり事し

まじり事しはらくよ

まじり事しはらくよ



秘  
くわんてんてんてんてんてんてん

弁  
あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつた

あつたあつた 可 巧海浩

あつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

琴<sup>キ</sup>あつたあつたあつたあつたあつた

白虎通曰琴者禁止於邪氣以正人

心也

文選曰曠三奏而神物下降何琴

德之深也 馬融琴賦

私勸文選琴賦 批唐 在此文馬融

作笛賦作賦無此文若他賦之文欲

猶可勸之素然私云此勸佳不知誰



人之所作

<sup>秘</sup> 琴の根原ときこめがれん

ま

私けまらる

天地とかひり

<sup>秘</sup> 樂書曰琴 動天地感鬼神

私花鳥よハてんちと雁ふらきり所

海もてんちとんかせ

<sup>秘</sup> 天つら代かひり 礼樂通鬼神

より川の物の移らよとてひて

<sup>秘</sup> 禱の末意琴の音のよとていかせ

<sup>秘</sup> 諸意琴の音のよとていかせ

て洞あふぬや

れ

<sup>秘</sup> 琴の音の抄り

<sup>秘</sup> 琴の音の抄り

これ國よひきいけふぬり

婆羅門僧正始渡本朝 但元恭天皇



文武天皇モ彈琴給シ

秘 うつふの物清みくくもり

弄 うつふのこころけりあまあり

おりのやうとまぬ四よ

うつふのこころけり遺唐使の時後新國

めての事

雲いうけらけりこころけりあまあり

をくくくく

礼記 樂者天地之和 又曰移風易俗天下

皆寧 言樂用而正人理 和陰陽

漢書禮樂志曰象天地而制禮樂所

以通神明立人倫 師右曰 倫理也 又曰孔子曰

安上治民莫善於禮移風易俗莫善

於樂 師右曰此孝經 載孔子之言

文選琴賦曰至摠思制為雅琴大

周正樂曰賀韜吳人也常夜彈琴感

鬼神見舞數曲斯亦妙之至也

立音得失事



文選嘯賦

成公子女  
谷梅

曰發徵則隆久之逝莖

騁羽則嚴霜夏凋動商則秋霖春

降奏角則谷風鳴條注翰曰逝養也

徵夏音也故冬發此声則炎氣至羽

冬音也夏騁此声感嚴霜至高秋音

也春動此声則秋霜降角春音也秋

奏此声感溫風鳴條也谷風則春風

也皆音律至妙感應有如此者善列

子曰鄭師文字琴於師表一一日子之

琴何如師文曰請嘗試之於是當春

而叩商絃以召南呂涼風物至草木

成實及秋而叩角絃以激夾鐘溫風

徐迴草木發榮當夏而叩羽絃以召

黃鐘霜雪交下川池暴涸及冬而叩

徵絃以激蕤賓陽光熾烈旱冰立散

師襄曰雖師曠之清角鄒衍之吹律

無以加之張湛曰商金音屬秋南

呂八月律角木音屬春兆鐘二月律



羽水音属冬黄鐘十一月徵火音属  
夏蕤賓五月律

郑玄礼记注曰喜葢也声类曰喜蕤字  
うつ乃物造一うけ琴とけうまひ  
ゆうおくののかりくまてた  
とよらういぬひらけうまうま  
中れ十日のやとい雪やとゆのま  
てふかみしおがきんおとらまのま  
きにこのまうぬハたううまのま

あまハ之いらくとりまのりり  
らうしれひまのまかうまのま  
ふかともんいふかまのま  
事成あまのまのまのま

おんみのまのま

琴書曰堯大徳堯彈感天神降聽儼  
然言和至也故堯制神人賜  
礼記曰夫礼樂通乎鬼神  
蕤葢香散楚江頭湘竹葦取邊溪不收



莫地悲絲寫離怨夜深簾外鬼神愁  
聽琴 永傾

あまびひく人らうらひとらふ

并 琴大書かたはななりぬい事なきあは

ことけはちこせつとくぬぬぬぬぬ

乃るまはさう事りやふいふ事し

うはさるまうら

ひはうまおるはかとも

えんのねとらむく何事ともハ

世中よいてるあれて 何と歌

と海うらこ海し

日本のはさハよりぬえれん

なしうあれめまて

大かこのはこりりか家事りりまこ

うらうらきこらう 乞も曲し

うよつこりりかぬしお乃さうり

何 日本紀見在書目六 友依世撰

樂家 ナニヲ 琴経二卷 蔡伯喈撰 柳子厚撰

何 衆送し中 琴作最優 文選



琴操三卷

晋黄陵相所撰

琴法一卷

赵耶梨撰

琴録一卷 琴作譜立卷 雜琴譜百七卷

琴用手法一卷 彈琴手法一卷

雜琴手法一卷 既成曲一卷

師と主人もななくて

弄 上よりなかりませ

何 佛智も無師智とてあり 從師も無師

独悟の人あり 何事し いろいろ 八月得

とらふ事し

ありての人よ ありてこそ 可 古人相傳

何 源氏の才なり といふ 是月此なき 誠み

ふかきこと

ちおけよ といふ くらおし くらおし

秘 夕霧れお 演せ さま 事 といふ あり

弄 夕霧れお 演せ さま 事 といふ あり

おれ といふ ころの

秘 明石の流るるの 舟 源 といふ こと

そと といふ こと



<sup>秘</sup> 元朝のしよと葉し

二文いぬりきしぬありて <sup>可</sup> 今上はひ

<sup>秘</sup> 好よ或る心と云人なり

<sup>弄</sup> け所服の事好よ或る二文の自音なり

所の心ととハハよゆなり

<sup>弄</sup> 明石乃女衛のよ世よ上ハ心つりて又世

よの和琴と源氏よもつりて

かつたあそひ <sup>可</sup> 信るよ <sup>弄</sup> 葛城品

<sup>可</sup> かほつたの寺のまかなつたやうなものの

りしたるや <sup>弄</sup> えれよのくまのぬき

やまらむしはくやきとく <sup>弄</sup>

まこつてハくふりさうへんやよ

こみせんやを <sup>弄</sup>

<sup>弄</sup> かつた呂れうせありそ二勅

おれ清てはくひハ <sup>弄</sup> 世よ上れん

よのてあし <sup>弄</sup> 然況し <sup>秘</sup>

<sup>可</sup> 輪手 <sup>弄</sup> 痛況し

私云 源況し一然や



かへりしとくくれとく庵かりて

并 呂より律よなりぬ

秘 葛本ハ呂之律乃くさありせし

何 将律調 琵琶にあり呂より律よなり

何 時彈し

三ふんぶりのとく庵 カケ降のさし

何 琴カケ調 捨手 カケテ 片垂水字舞套海波

雁鳴調一洗胡 瓶瓦白氏六指才十八日

瓶者胡人卷蘆葉吹之以作声也胡曰瓶

播鳥琴曲

何 らうふ才三 いさる衆 三ふ二月しよと成らう

此部よりとく庵さくのめてとよしよ

とせりくしあそひ

并 ぬへし見河海 或ハ立六乃く

立六乃くといとせり落くとはし

何 万秋立六指るり破るり破よあは家放

り立六の破あしよふ今葉中花盤侍

調有久破る可劫をそ存在万秋立六



不審立ヶ調中有立六破木右手  
立六乃らら弄況と未定、  
秘 不知事、  
秘 不知事、  
秘 不知事、

去秋、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、

秘 不知事、  
秘 不知事、



文の清くいふ

秘 女三交

あやしやおの〜と

源のふりまきての終り

えれおら〜まねゆき〜

秘 女三交〜源氏よま〜

い〜まいさぬえ 高藤節

清子れ〜らぬ〜

夕暮のちお子是乃横節

いほきも〜み

秘 源の清清才子と〜

ちりり〜水色キタノハ長流

人〜源のち〜

ゆ〜の〜れ〜りて

紫上れゆ〜のち〜

こらわれ〜い〜 秘 雲のれ厚れ昇

こ大えれ 昇 折返山方寺

院いぬ〜れ〜り 秘 紫上れ山方

元 東射は山上れ方



くはさきりほく

兼 兼上ハ女ニ宮乃由こはしはりほく

兼上ハいもこ喜れゆいふくひほく

日こりうなほすて 兼 源氏ト兼上ト

文の清くとの祥ハ 兼 源の月

くしめりうこあけて 兼 兼上浩

しるのあくそく

兼 他よりうまい

まう

秘 源の月

兼 あり

てはとあく 兼 兼上

うはさくまう

兼 兼上

いほりういされハ

秘 兼 兼上

兼 兼上

虎も四も



孝産今上れ女之よ琴とをき一節かん  
と作し梅のむらりかめはさくとし

さうたよりして 大義とさうたよりん

ひらりりぬ花と 秘 紫上細の乃時的事

その時よの頃もひまれうりし

并 紫上印のの時的事 見

いそくそりし

紫の和琴の事いしは事とよわし

しこ又おれくし

紫のさうらのの屋うたふまきふり

さくしうりよたひはくみ事といふ

いさぐりぐりぬり人 可 見し

秘 かげしよらうりしと具し一節かんか

らうし

并 紫上流事具し一てみるか

ゆきし梅のさうらきさうら 流 流れん

あしし梅てさうらなりぬ

并 流れし十年おしりしとらふりハ



若葉より七つりのいづれもいづれもいづれもいづれも  
月かみくし一もせむ女（重）重（重）厄（厄）

秘

女ハ亦七重厄之為る女（重）院も亦七重厄之  
一もつり熱し一ハ葉上ハ原よせりり  
のいづれもいづれもいづれもいづれも  
葉上ハ四下ありつれと葉上或りありし  
ありてかくかきかたなりし

おさかひりし一く 海のものもいづれもいづれも  
おろさるるいづれもいづれも

秘 大徳なるもの事し 秘

あそりいりの

秘

山僧都之 葉上れおら之僧都入滅事

あはハ一もいづれもいづれも

おろさるるいづれもいづれも

たづねの事し一もいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれも 并 原氏の浩

秘

原のいづれもいづれもいづれもいづれも

いづれもいづれもいづれもいづれも



かろいさめとみか 并 止ぬり事おし

ま川ハさよんり

秘 夕白上 葵上 蔭雲るし

私母又衣介私母又衣がしなむ事と

おもしろい

それうかくてわ

秘 秘深あときあふ事ハかえれと

私あしれめもれあひぬるよかく

何んおひいーいあむいあむと

私弁の儀ある

大いしるるにはふまうくく

お庄乃人なしきにはひよけうぬ

つまこのほひけうや

しるるあむ事と

秘 董北三やせ 兼

け乃沙とまれうた

秘 娘ま乃公のしひさふよらむか思

會り事



あつこころとふかみほり

秘

今までもらうこゝれ世にぐまて有  
きほりし観しころ也

并

うれきおとみくわりのるれせり

しきてかくてあつこころし観  
ふほりや

むしりのごらりも

兼

河内製し

雪ぎこえりしはとて

兼

雪きしに神をのまつていし

くすみへりしはつてきり中務集

兼

雪きしあつこころし観しころ也

し似合ふり

あつこのはりわつひか

何

芹をこころまらふ

才共ニ

文選曰野人有伎矣皆而養芹子者  
欲献之至尊雖有區々之意亦已

疏

徳叔夜与山臣僚絶交書

注曰善曰列子曰朱國



有田文常濕麻責玉春自曰恭當今時  
不知有廣其澳至解僅狐貉顧謂其  
妻曰負日之曠人莫知之以獻五君  
得有賞也其室告之曰昔人有養我  
菽月菓莖芥苳子村鄉慕梅(豪  
取章之

涉彼南山言未其敵(毛詩草虫  
いと并のぬだい  
精とのぬれこ

何 <sup>イモリ</sup> 齊 潔齊 精進

汁(こ)ふん(ひ)と(う)さ(い)る(い)と(と)人  
乃(と)る(う)を(は)の(り)あ(く)ぬ(も)め(と)ん(丸)

所(し)つ(ま)て(る)か(ら)ふ(る)事(事)な(れ)  
培(う)て(山)室(む)か(の)と(う)み(たり)か  
人(ひと)し(や)

何(何)の(た)う(う)し(し)  
<sup>松</sup> 昨(け)ま(の)と(う)あ(や)  
<sup>養</sup> 大(大)ま(の)熱(ね)の(こ)あ(り)ぬ(こ)



<sup>とま</sup> 考のたかしののろひひてんうろくあき  
 行やとゆーまうーと

<sup>秘</sup> 大書の守て八家の五取してそれ  
 うるはりいいたあまうーと

<sup>非</sup> あねまの守て八家の事せよ八家の  
 行はまうーあまうーあうはまうーあう  
 折で

<sup>等</sup> 前うーあうーあうーあうーあうーあう  
 うさうーあうーあうーあうーあうーあう

なしわてはうーあうーあうーあうーあう  
 あうーあうーあうーあうーあうーあう

<sup>中ま</sup> 雪ぬるはうーあうーあうーあうーあう  
 うやうーあうーあうーあうーあうーあう

<sup>光</sup> まれてうやうーあうーあうーあうーあう  
 てうやうーあうーあうーあうーあうーあう

今葉はうーあうーあうーあうーあうーあう  
 うのたうーあうーあうーあうーあうーあう



下しひき 以上花鳥

秘

中書乃弁や我方のわつし海にぬり  
そらにほみらやとくし年にもみれい

乃らうとや

衆

中書乃弁

衆

け中乃の氷しあり但にさるやうし  
とあまを芥ううとくしとくし  
ことりしとやいひ

中納言友よりととまふこと

秘

以下弟子地也

衆

細くの水着佐乃事とくし  
ぬりしとや董し白まや

花さうりのはまうしと紫し

可

は書し乃始りや好しとくし  
きりれしとくし

衆

去年乃書の事し

秘

去年の書れ事やぬがしとくし  
ありてくみられしとくし



事

又とみと成めし事なりし

去年新りし事なりしハ又も

事といひし事なりし

<sup>白文</sup> けしめしし事なりし事ハ霞庵

とてし事なりし

<sup>秘</sup> 白文より事なりし事なりし

白文より事なりし事なりし

の事なりし事なりし

霞庵とてし事なりし事なりし

事

<sup>秘</sup> 去年の事は事なりし事なりし

この事なりし事なりし

事なりし事なりし

事

心成りし事なりし事なりし

事

白文より事なりし事なりし



ホウシのさぬとさうらとをなりてしは  
さう紙とめりし紙すし紙  
さうらとさうすし

かしうありはうみのうさくしりそと  
けしうそと

<sup>秘</sup> なひくはひかけまてし文のそと  
さうらりめし

<sup>筆</sup> 西のかがりけさの感し文のそと  
あしうらりよとすあつし

<sup>色</sup> いけくさふにひさしん墨  
りさうらりさうそ

<sup>秘</sup> 中若のそと

西のそとをさうらりし  
服のそとをさうらりし

<sup>筆</sup> さいやんしめすし墨  
さいやんしめすし墨

さいやんしめすし墨  
さいやんしめすし墨



花

深草の野を乃撫一公あつたて  
くもりいそみ深まきけ

今草鹿乃又と八里を深まきけ  
のまじやまされま

何

いししとあつたていけくま

高瀬すまき

くまにぬりし

秘

白美乃心美

わくしやひま

蒸れの中

いしけづりまふりしゆんま

美

蒸乃理運しは振まらる

ろくまをまき

いそりからしはおしゆん

秘

白美の心美

竹蒸乃くいましゆん

いそりからしをまきしゆん

秘

白美乃心美



ふんふんあいの事とて

美

白文乃我なりあまの人の心

かたにわたりてこゝろゆる

とほりて

大のさの事と

秘

夕霧れさき白文あしき

花うけなれあひつらに

美

夕霧乃さきと白文あしき

をくひかき

何事れゆえれをみとらき

美

夕霧ゆりての心と白文の

むらりて

うのこゝろの事と

世に文乃ゆり

字依りて

蕉乃字依りて

由りやうり人の心

秘

蕉の事とあまの心に



かまて大まきまゝさうらう〜活版  
ふせ

美 薫りの心をいふ

女心をけりさし

美 大まきをさしていふ

かまへにまきてさぬる

美 薫せ 来

朝とくみのなをに

何 夏の日のと朝とをくみあつものを

美のせきせし〜のてさ〜

美 朝日のこ〜心とく〜西の空〜

うらお〜にらや

うら〜のまやの佛の清きあは

美 美の清きせ〜方なれいけ母や佛

美 美あり

うら〜いよわ〜りぬまよ

美 美の清き〜の我〜く〜母りまを

うら〜あ〜〜に



有まうーいふ事一ののーとあひあひよ  
なりのをく

うきうねーいふりーいふ

井 かののわのあなり

いふりすまうーわいーいふんぬみとふか  
まは

秘 細い葉のありあうくみとね

まよく 葉

とにそふ屏ぬ

葉 澤子乃こあこ葉のわねくふと

ぬり屏ぬ

包き、包りてみまま

たみせうりせ

こりしにま丁をまうーそあ

はうーいああーせあのあれとら

ーまーあうー

包よろりやうー

秘 葉のまぬーいせー 葉 井



月の上をさしとくさうあつた

わあいのやりての巻なり

うれいまだとていせ

<sup>井</sup>漳子れああいりわい

とていりのん

ふれいみり

<sup>美</sup>高きい帝のまだし

まだし

ぬいよのすよ

二回の巻せ

このりーにむいてあき

ー

いりーハ蓋のそ漳子やうの書

とてそふむいの漳子とて

と漳子とて

あきいりー

<sup>秘</sup>水書いりあきいり

とて漳子



しりびらりふらりいそ

秘 中まじ 弁 兼

その清き色の人くく

兼 蕙の清き色人くく

こころびふれひくくくくくくく

ぬ

濃鈍色蓋草色 紅のきくみくく

服とのますく

にびくくふけみ

秘 けきあり

弁 けきせ物まよてみくく世のくく

言や

同云中君服中く何のきくくけ

帯のきくくく

一帯帯くくく唐衣れくくく

くくくや服若くくくくく

如く

同云ひくくくくくくく



なりけり哉

一谷唐衣しうひさるぢくふりり  
腰とてあやせ

まひきく

<sup>美</sup>人のみちやうに合時かきしり幸し上  
右をふきき幸せ

うび屋しやうさいおしけなる人れみ  
しちきすあさうめ花

拾いのありさをも髪をよめし

ぬりし

かこつめおし

<sup>美</sup>うづうかのきし

女一美うしぬめおつとくま

<sup>花</sup>今上乃侍女め名乃中女の御服<sup>美</sup>

<sup>秘</sup>し上の美め名の中宮れ御服之董か

乃たにみこまうりし幸し

入かきりいそかりけりしあさう

色し哉



并 あね若せ

秘 大若く月さぬらふさ由

あふいり屏風をさく

秘 さあぬ人りいさ

いふれてさくせぬは

秘 董乃事とさく

并 董心のさきぬりさく

いふさくさくさくさく

董乃ゆらさくさくさく

乃ひさくさくさくさく

さくさくさくさく

さくさくさくさく

何 紙又のあせのさぬ

おれさくさくさくさく

美 中若くさくさくさく

ゆさく

かきさくさくさくさく

—



可 さけくさくありあり

秘 髪れをさくさくありあり

義 物さひりりありあり

又ありりりありあり

可 翡翠 鳥れ名くさくありあり

并 翡翠 鳥れ名くさくありあり

髪と又くさくありあり

秘 又髪なりりりありあり

とさくさくありあり

うけくさくありあり

花鳥りりりありあり

花鳥りりりありあり

翡翠 鳥名赤羽曰翡翠

小如燕毛青黑色翎深青有光

飛水上食魚翡翠大如鳩毛紫赤翎

點々青不深無光秋林栖不食







あり又六条侍り鳥羽をくらし神を  
河内をましむけし其のよはめり  
依りりしとし其のまてり舟流ぬ  
乃時こてまらきし源氏の文と  
紫の紙をぬてきて右のくさう  
はきしきこら也

う乳ももわれさぬさうて

大まのついで中まもりもぬ球  
くならや生得りくく人とき

いしむり

むらりむらりむらり

中まのし 并美

あふし紙をまに拾てしひらりい  
いむらりいむらり  
中まのしぬ



18  
19  
20  
21  
22  
23  
24  
25  
26  
27  
28  
29  
30  
31  
32  
33  
34  
35  
36  
37  
38  
39  
40  
41  
42  
43  
44  
45  
46  
47  
48  
49  
50  
51  
52  
53  
54  
55  
56  
57  
58  
59  
60  
61  
62  
63  
64  
65  
66  
67  
68  
69  
70  
71  
72  
73  
74  
75  
76  
77  
78  
79  
80  
81  
82  
83  
84  
85  
86  
87  
88  
89  
90  
91  
92  
93  
94  
95  
96  
97  
98  
99  
100



